

令和 5 年 5 月 29 日現在

機関番号：17401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00912

研究課題名（和文）語彙知識の構造化を促進するウェブ教材の完成とネイティブ度診断テストの開発

研究課題名（英文）Developing a Self-Study Online Vocabulary Learning Program to Promote the Restructuring of the L2 English Mental Lexicon and a Diagnostic Test Measuring the Degree of Nativelikeness of Word Clusters

研究代表者

折田 充 (Orita, Mitsuru)

熊本大学・大学院人文社会科学部（文）・教授

研究者番号：60270386

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：オンラインで取り組む英語語彙学習プログラム（Word Cluster Master Program: WCMP）の開発に取り組んだ。学習メニューは、動画、単語聞き取り・選択課題、単語グループ分け課題など6つある。名詞版・形容詞版・動詞版を開発した。同時に、学習者がメンタルレキシコンの単語間の結びつき度を可視化できる「ネイティブ度診断テスト」を開発した。大学生対象の実証研究から、WCMPが単語間の結びつきの構造化に有効であることが判明した。また「診断テスト」の受験は、英語語彙学習への動機づけにつながり、WCMP終了後の単語クラスター内の単語群の結びつき度を高めることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

メンタルレキシコン（Mental Lexicon: ML）内の英単語の構造化を促進する語彙指導法開発の重要性は指摘されてきたが、そのための語彙学習プログラムは従来存在しなかった。ML内の単語クラスター（意味の上で結びつく数語から成る単語のグループ）の構造化促進のためのオンライン自学語彙学習プログラムを開発する意義は大きく、英語教育（中でも大学英語教育）に寄与するところが少なくない。併せて、語彙学習プログラムの前後に短時間で取り組め即座に結果を知ることのできる“単語の結びつき度”を診断するテストは、日本人英語学習者、とりわけ大学レベルの英語学習者にとって有益であり開発する価値がある。

研究成果の概要（英文）：This KAKEN project addressed developing the Word Cluster Master Program (WCMP), a self-study online vocabulary learning program, that aims at promoting the restructuring of the L2 English mental lexicon (ML) of Japanese EFL learners. Among the six learning tasks in the WCMP, grasping the target semantic domain of a core word and five semantically-related words by watching an animated video clip, and selecting five words that belong to the same group as the presented word are included. We completed the Noun, Adjective and Verb versions. Furthermore, we developed a diagnostic test measuring the degree of nativelikeness of word clusters in the ML to boost the effects of the self-study vocabulary learning program. Our studies with college students, using the WCMP and the diagnostic test, revealed that the vocabulary learning program and the test brought about significant restructuring of word clusters, while motivating them to learn English words and their cluster structures.

研究分野：英語教育学

キーワード：英語語彙指導 再構築・変容    メンタルレキシコン    オンライン自学語彙学習プログラム    ネイティブ度診断テスト

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 英語語彙知識 ( 語彙のサイズ・深さ・構造・流暢さ ) の中でも「構造」については、単語の構造化促進のための語彙指導法開発の重要性は指摘されても、そのための語彙学習プログラムは従来存在しなかった。基礎となる、メンタルレキシコン (Mental Lexicon: ML) 内の単語クラスター ( 意味の上で結びつく数語から成る単語のグループ ) の構造化促進のためのオンライン自学語彙学習プログラムを開発する意義は大きい。

(2) 語彙学習プログラム開発と併せて、単語クラスターの単語間の結びつき度を診断するテストの開発は、日本人英語学習者、とりわけ大学レベルの英語学習者にとって有益である。

### 2. 研究の目的

(1) オンライン自学語彙学習プログラム Word Cluster Master Program (WCMP) について、すでに完成した「動詞版」に加えて「形容詞版」「名詞版」を開発する。

(2) 学習者が自分の「ネイティブ度」 (= 単語クラスターの単語間の結びつき度) を可視化し、英語学習への動機づけにつなげる。そのために、学習者が WCMP に取り組む前、そして取り組んだ後に短時間でできる「ネイティブ度診断テスト」を開発する。

(3) WCMP「動詞版」「形容詞版」「名詞版」および「ネイティブ度診断テスト」の効果について、「意味と形態の関係」「結びつきの変容・再構築」「変容の保持度」といった研究テーマを含め、大学教養英語教育において実証研究を行う。

### 3. 研究の方法

(1) WCMP は、1 つのユニットが 4 ないし 5 セット ( 1 ~ 10 ユニットが 4 セット、11 および 12 ユニットが 5 セット ) の学習クラスターから構成され、合計 12 ユニット ( 50 セット ( 300 語 ) の学習クラスター ) から構成するものとする。学習語は『新 JACET8000』(2016) の 8000 語内に入るもので、英語母語話者の ML 構造を踏まえた語彙データベース (Fellbaum, 1998; Miller & Fellbaum, 1991) である WordNet (2012) から選ぶ。学習クラスターに基づき、学習メニューを作成する。学習メニューは 6 つある。動画 ( コア語と 5 つのクラスター語の結びつきの把握。約 2.5 分 ) ( 図 1 ) → 単語選択課題 ( 同じグループに入る / 入らない単語を選ぶ。3 択式 5 問 ) → 単語聞き取り・選択課題 ( 聞き取ったつづりの単語 ( 示された単語の意味 ) を選ぶ。2 択式 5 問 ) → 単語選択課題 ( 文脈に合致する単語を選ぶ。2 択式 3 問 ) → タイプ入力課題 ( 日本文に対応する英文の空所に入る単語をタイプ入力する。5 問 ) → 単語グループ分け課題 ( 10 語から示された単語と意味的に関連する 5 語を選ぶ。1 問 ) の 6 つである。学習者は 12 週間にわたり主教材とともに WCMP に取り組む。1 週間に 1 つのユニットを授業内外で終了することとし、モデルとする学習時間は各ユニットに 60 分とする。



図 1. 動画

(2) 「ネイティブ度診断テスト」開発のために、学習クラスターの中から 4 つ ( 各品詞 24 語、『新 JACET8000』のレベル 8 までの単語 ) を抽出する。診断テストは、被験者が考える意味のまとまりでグループ分けさせる単語仕分け課題 (word sorting task) とする。被験者は 2 回目および 13 回目の授業において診断テスト (ドラッグ&ドロップ方式) にオンラインで取り組むこととする ( 図 2 )。前者を事前テスト (事前)、後者を事後テスト (事後) とした。テスト語の提示順は受験者 ( 回 ) ごとにランダム化し、未知語は「知らない単語」に分類させる。受験直後に診断された「ネイティブ度」 ( 正答率とレーダーチャート ) が表示される仕様とする。診断結果

は、「再現率」「適合率」「総合スコア」(図3)から構成され、各クラスターについて3種類の指標から多角的にネィティブ度がわかるようにする。診断テストは、その後の学習の指針とな



図2. ネィティブ度診断テスト

るものとし、いわゆる「正解」は示さないこととする。

(3) WCMP の効果について、ネィティブ度診断テスト完成前に4つ、完成後に同テストを実装した WCMP を用いて2つの実証研究を実施した。「事前」「事後」などにおいて収集したデータに対して群平均法によるクラスター分析を行い、仕分け課題解析結果の表象である群デンドログラムを得た。そして、群デンドログラムは理論的に非類似度 (dissimilarity) が 0.0 ~ 1.0 の「高さ」から構成される距離行列であることに着目し、並べ替え検定により群デンドログラムの距離行列間に有意差はないという帰無仮説のもとに解析を行った。



図3. 総合スコア

#### 4. 研究成果

(1) WCMP「名詞版」を用いて、学習者の ML 構造 (特に意味的に関連度が高い単語グループ) は再構築・変容するか、語彙項目の想起において意味は形態に常に優勢か、という2つのリサーチクエスチョンに取り組んだ。実験群と対照群、それぞれの事前と事後のデンドログラム間に有意差があるかどうかを確認するために、仕分け課題解析結果の表象である群デンドログラムの距離行列の距離の差の有無 (ペアワイズ比較) に関して、ペア間に差はないという帰無仮説のもとに並べ替え検定を行った。実験群では事前と事後の群デンドログラムの距離行列間に統計的有意差が検出された (5% 有意水準, 片側検定)。対照群では事前と事後の間に有意差がないことが判明した。学習者の持つ語彙構造の再構築・変容を目的とする WCMP の効果が確認され、また変容のための特別な語彙学習を課さない場合には ML 構造は有意に変容しないことが確かめられた。そして、ML 内の語彙項目間の結びつきは意味によるものが圧倒的に多く、形態が関係するものは限定的であることが判明した。実験群の結果 (事後) の群デンドログラムから、WCMP「名詞版」で目標とした4つの学習クラスターのすべてについて、意味的に関連するコア語とクラスター語がはっきりと構造化し、構成する単語間の関係が明確になった。しかし、対照群の事後においては、事前からの顕著な変化は見られなかった。WCMP「名詞版」による語彙学習トレーニングの効果が確かめられ、併せて語彙項目間の結びつきが探索・想起される場合、意味を基盤になされ、発音や綴りといった形態が関係することはまれであることを明らかにできた。

(2) WCMP「動詞版」を用いて、被験者 (4人) の中で再構築・変容した単語間の結びつき数は長い期間 (1年6ヶ月) が経過した後も保持されるか、被験者の中に保持される単語間の結びつき数は、語彙サイズによって異なるか、という2つのリサーチクエスチョンに取り組んだ。語彙サイズに関わらず、いずれの被験者も事後の結びつき数は増えた。しかし、語彙サイズの大きい被験者が、小さい被験者より、事後の結びつき数が増える傾向となった (図4)。語彙サイズが 5200 語と最も大きい被験者 4 のみが遅延における単語結びつき数が 10 個を超え、保持率

が 50%を超えた。単語間結びつきの長期的な保持と被験者の語彙サイズの間には関係があると言える。そして 1 年半後の保持が可能となる英語学習者の語彙サイズの閾値はそれより高いと推定される。遅延事後テストにおいて、保持度ゼロとなった「学習クラスター」について、被験者の語彙サイズではなく単語そのものに関する要因、特に単語の頻度が関係している可能性が高い。また、折田他 (2017) で、WCMP での学習で習得された ML 内の動詞間の結びつきが 1 年 2 ヶ月経過した後も保持されたのは、平均語彙数 5050 語の被験者であったことと考え合わせると、ML 構造の長期的な保持と被験者の語彙サイズの間には関係があると言える。1 年半後の保持が可能となる英語学習者の語彙サイズの閾値はそれより高いと推定される。

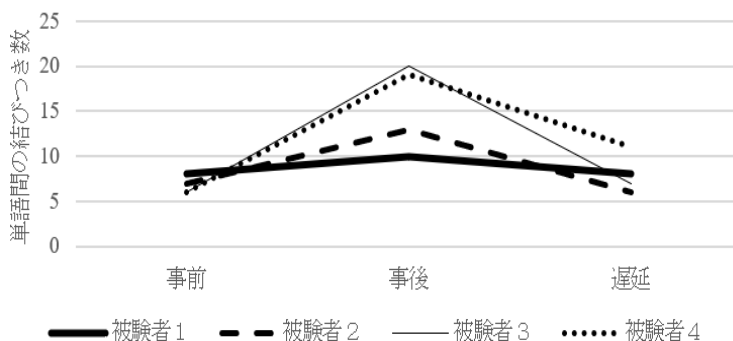


図 4. 単語間の結びつき数の推移

たのは、平均語彙数 5050 語の被験者であったことと考え合わせると、ML 構造の長期的な保持と被験者の語彙サイズの間には関係があると言える。1 年半後の保持が可能となる英語学習者の語彙サイズの閾値はそれより高いと推定される。

(3) WCMP「名詞版」を用いて、被験者の語彙サイズが異なるとその ML 構造も異なるのか、語彙項目の形態は ML 内の結びつきの表象と関係しているのか、という 2 つのリサーチクエストンに取り組んだ。結果から、語彙サイズが有意に異なると、ML 内の英語名詞のクラスター構造も有意に異なることが確かめられた。語彙サイズの小さい被験者では、語彙項目間の結びつきの検索・想起において L2 語彙に類似する形態による L1 語彙項目との結びつきが探索・想起される場合もあることがわかった。特に日本語でカタカナ語として定着している college のような高頻度語では、形態の上からも L1 と明確に異なる語彙項目として意識させて学ばせることが、大学レベルの英語学習者(とりわけ語彙サイズの小さい学習者)にとって重要であると言える。

(4) WCMP「名詞版」(6 週間の短期集中トレーニング版)を用いて、WCMP への取り組みを通して、学習者の ML 構造は再構築・変容するか、WCMP への取り組みの結果、ML 内の語彙項目間の「結びつき」は精緻化するか。また、その「結びつき」に関して、単語の頻度やカタカナ語であることはどの程度影響しているか、という 2 つのリサーチクエストンに取り組んだ。WCMP を課した実験群では事前と事後の群デンドログラムの距離行列間に統計的有意差が検出された。一方、WCMP を課さなかった対照群では事前と事後の群デンドログラムの距離行列間に有意差がなかった。WCMP の効果が改めて確認され、変容のための特別な語彙学習を課さない場合には ML 構造は有意に変容しないことも確かめられた。WCMP による 6 週間という短期集中トレーニングでも、英語 ML の構造が再構築・変容する。事後の結果から、実験群では単語間の結びつきは精緻化した。対象群ではそうではなかった。単語の頻度やカタカナ語であるか否かといった実験語の言語的要因は限定的で、主として WCMP での学習を通して構造の再構築・変容がなされることも明らかにできるとともに、WCMP の効果が再確認できた。

(5) WCMP「形容詞版」(「形容詞トレーニング」)を用いて、「形容詞トレーニング」での学習前、また学習後における ML 構造に相違があるか、「形容詞トレーニング」への取り組みを通して、ML 構造は再構築・変容するか、再構築・変容された ML 構造の特徴はどういったものか、という 3 つのリサーチクエストンに取り組んだ。まず事前において、上位群と下位群の間の群デンドログラムの距離行列間に統計的有意差が存在したことが判明した。つまり、英語熟達度が異なれば、ML 構造も有意に異なることが明らかとなった。一方、事後における上位群と下位群の間の群デンドログラムの距離行列間に統計的有意差がなくなり、「形容詞トレーニング」への取り組みを通して、上位群と下位群の ML 構造の差異はなくなったことが確認できた。つまり、英語熟達度が異なり、ML 構造の異なる 2 つの学習者群が 6 週間の「形容詞トレーニング」への取り組みによって、いずれも ML 構造が再構築・変容され、両者は等質に構造化された。形容詞トレーニングは、上位群 (CEFR で B2 および C1 レベル) だけでなく、A2・B1 レベルの学習者 (下位群) の ML 構造の再構築・変容にも有効であることがわかった。上位群・下位群ともに事前と事後の群デンドログラムの距離行列間に統計的有意差が検出され (5% 有意水準、片側検定)、「形容詞トレーニング」の効果が確かめられた。折田他 (2016, 2019) において確認された ML 構造の再構築・変容を目的とする WCMP の効果が本実証研究でも改めて確認できた。特に本実証研究から、参加者の英語熟達度に関わらず同学習プログラムが有効であることがわかった。

事前においては上位群と下位群で既知の単語数およびその構造化のいずれにおいても著しく異なったが、「形容詞トレーニング」での学習を経て、事後においては両者とも同様に目標とする

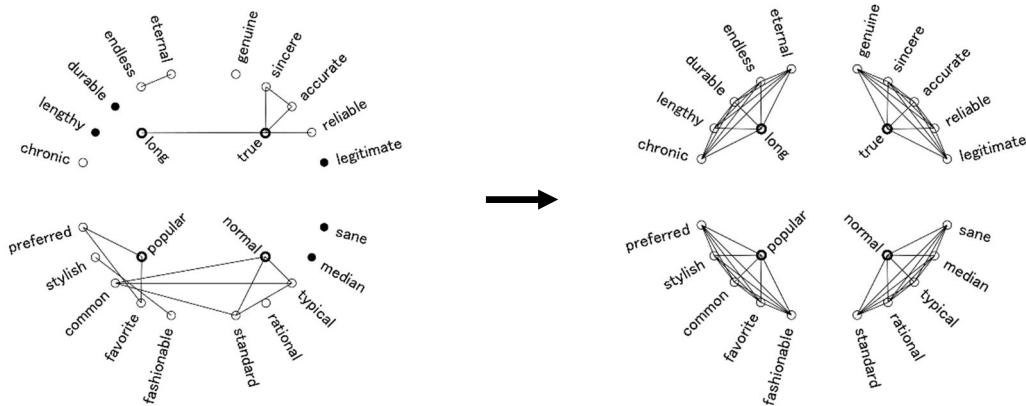


図5. 下位群被験者Aの「事前」「事後」の結果。図の内側の単語はコア語，周りの単語はクラスター語，うち 黒は未知語に分類されたクラスター語，実線は結びついた単語

クラスター構造に緊密に分化・構造化された。事後で目標に正確に構造化できた学習者は，診断テストのなかった折田他 (2016) では2人 (7%) ,また折田他 (2019) では5人 (17%) であった。診断テストを導入した本実証研究では，上位群20人 (67%) ,下位群22人 (73%) と大幅に増加した (図5)。厳密には，テスト語の品詞が異なり慎重に考える必要があるが，これらの比較からも，本実証研究において診断テストを導入した効果があったと言える。つまり，診断テストを「形容詞トレーニング」での学習に入っていく前に受け，スコアやレーダーチャートから自分のネイティブ度を知ることが学習の指針として機能し，学習終了後に正確なクラスター構造化を達成した学習者の増加につながったことが示唆される。

(6) WCMP「名詞版」(「名詞トレーニング」)を用いて，語彙学習プログラムに取り組む事前・事後それぞれにおいて，上位群と下位群のML構造の間に計量的な違いがあるか，WCMPへの取り組みを通して，被験者のML構造は再構築・変容するか，事前・事後それぞれにおいて，上位群と下位群のML内のクラスターの階層構造に質的な違いがあるか，という3つのリサーチクエスチョンに取り組んだ。事前・事後のいずれにおいても上位群と下位群の群デンドログラムの距離行列間に統計的有意差は検出されなかった。「名詞トレーニング」に入る前，つまりいわゆる「学習前の状態」において，上位群と下位群のTOEIC-IPスコアが有意に異なっても (約153点の差)，ML構造には明確な計量的な差異はないこと，そして12週間の「名詞トレーニング」終了後のML構造に計量的な違いがないことが判明した。名詞は熟達度によるML構造の差異が動詞より小さく差異が検出されにくい可能性がある。

上位群，下位群ともに事前と事後の群デンドログラムの距離行列間に統計的有意差が検出され，熟達度に関わらず，診断テストを実装した「名詞トレーニング」の有効性が確認された。WCMPでの学習に入る前に診断テストがあったのは折田他 (2022) の「形容詞トレーニング」のみであった。本研究の「名詞トレーニング」でも診断テストのあるWCMPの効果を確認でき，診断テストから入る自律型語彙学習プログラムはML構造の再構築・変容を確実にすると言える。単語群の階層構造について，上位群は単線型が2つ，複線型が2つとなり，下位群は単線型がなく，すべて複線型が占めた。上位群では2つの単線から成る構造 (DIRECTIONクラスターにおける「複線 (場所+指導)」およびLOVEクラスターにおける「複線 (献身+感情)」であった。下位群では，事前の結果が局所的に保持され (DIRECTIONクラスターの「複線 (指導+場所，+area)」やISSUEクラスターの「複線 (結果+問題，-area)」)，支線を持つ複線構造 (LOVEクラスターの「複線 (献身+感情+崇拜)」) が形成され，「名詞トレーニング」での学習がクラスターの再構築・変容に反映され切れていない。上位群と下位群の間のML構造に有意な計量的な差異は検出されなくても，語彙クラスターの階層構造に質的差異が存在することが明らかになった。

#### <主な引用文献>

大学英語教育学会基本語改訂特別委員会 (編) (2016). 『大学英語教育学会基本語リスト新 JACET8000』 大学英語教育学会

Fellbaum, C. (1998). A semantic network of English verbs. In C. Fellbaum (Ed.) *WORDNET: An Electronic Lexical Database* (pp. 69-104). The MIT Press.

Miller, G. A., & Fellbaum, C. (1991). Semantic networks of English. *Cognition*, 41, 197-229. doi: 10.1016/0010-0277(91)90036-4

Princeton University (2012). *WordNet Search - 3.1*. <http://wordnetweb.princeton.edu/perl/webwn>

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 11件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 折田 充・村里 泰昭・小林 景・吉井 誠・Richard Lavin・神本 忠光・相澤 一美	4. 巻 51
2. 論文標題 熟達度の異なる大学生の英語心内辞書における名詞群の階層構造	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 九州英語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 折田 充・小林 景・村里 泰昭・相澤 一美・レイヴィン リチャード・神本 忠光・吉井 誠	4. 巻 34
2. 論文標題 英語心内辞書の再構築・変容を促進する語彙学習プログラム ネイティブ度診断テスト導入の効果	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 全国英語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 161-176
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20581/arele.34.0_161	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 折田 充・小林 景・村里 泰昭・吉井 誠・Richard Lavin・相澤 一美	4. 巻 1
2. 論文標題 英語心内辞書の再構築・変容を促進する語彙学習プログラム ネイティブ度診断テスト導入の効果	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 全国英語教育学会第47回北海道研究大会発表予稿集	6. 最初と最後の頁 100-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 折田 充・村里 泰昭・小林 景・神本 忠光・相澤 一美・吉井 誠・Richard Lavin	4. 巻 50
2. 論文標題 英語心内辞書における名詞の結びつき 再構築・変容、精緻化	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 九州英語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 折田 充・村里 泰昭・小林 景・神本 忠光・相澤 一美・吉井 誠・Richard Lavin	4. 巻 1
2. 論文標題 英語心内辞書における名詞の結びつき 再構築・変容、精緻化	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 全国英語教育学会第46回長野研究大会予稿集	6. 最初と最後の頁 314-315
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 折田 充・村里 泰昭・小林 景・Richard Lavin・吉井 誠・相澤 一美・神本 忠光	4. 巻 49
2. 論文標題 英語心内辞書の再構築・変容 意味的に近接する語彙項目群の構造化	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 九州英語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 折田 充, ・村里泰昭・小林 景・吉井 誠・Richard Lavin・相澤一美・神本忠光	4. 巻 63・64
2. 論文標題 語彙サイズの異なる大学生の英語心内辞書	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 熊本大学英語英文学	6. 最初と最後の頁 207-222
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 折田 充・村里泰昭・小林 景・神本忠光・相澤一美・Richard Lavin・吉井 誠	4. 巻 48
2. 論文標題 心内辞書内の単語の結びつき方ー英単語学習プログラムへの取り組み前、直後、1年半後ー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 九州英語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 9-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 折田充・村里泰昭・小林景・Richard S. Lavin・吉井誠・神本忠光・相澤一美	4. 巻 47
2. 論文標題 英語心内辞書の構造化における意味と形態の関係	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 九州英語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 折田充・村里泰昭・小林景・神本忠光・相澤一美・Richard Lavin・吉井誠	4. 巻 1
2. 論文標題 心内辞書内の単語の結びつき方 英単語学習プログラムへの取り組み前、直後、1年半後	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 第45回全国英語教育学会弘前研究大会発表予稿集	6. 最初と最後の頁 240-241
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 折田 充・村里 泰昭・小林 景・吉井 誠・Richard Lavin・神本 忠光・相澤 一美
2. 発表標題 熟達度の異なる大学生の英語心内辞書における名詞群の階層構造
3. 学会等名 第50回九州英語教育学会佐賀研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 折田 充・小林 景・村里 泰昭・吉井 誠・Richard Lavin・相澤 一美
2. 発表標題 英語心内辞書の再構築・変容を促進する語彙学習プログラム ネイティブ度診断テスト導入の効果
3. 学会等名 全国英語教育学会第47回北海道研究大会
4. 発表年 2022年



1. 発表者名 折田 充・村里 泰昭・小林 景・神本 忠光・相澤 一美・吉井 誠・Richard Lavin
2. 発表標題 英語心内辞書における名詞の結びつき 再構築・変容、精緻化
3. 学会等名 全国英語教育学会第46回長野研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 折田 充・小林 景・相澤 一美・村里 泰昭・神本 忠光・吉井 誠・Richard Lavin
2. 発表標題 熟達度の異なる大学生の英語心内辞書構造 名詞群・形容詞群・動詞群の比較
3. 学会等名 第 49 回九州英語教育学会長崎研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 折田充・村里泰昭・小林景・神本忠光・相澤一美・Richard Lavin・吉井誠
2. 発表標題 心内辞書内の単語の結びつき方 英単語学習プログラムへの取り組み前、直後、1年半後
3. 学会等名 第45回全国英語教育学会弘前研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 折田 充・村里 泰昭・小林 景・Richard Lavin・吉井 誠・相澤 一美・神本 忠光
2. 発表標題 語彙サイズの異なる英語学習者の心内辞書構造の相違
3. 学会等名 第48回九州英語教育学会宮崎研究大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	村里 泰昭 (Murasato Yasuaki) (90229980)	熊本大学・大学教育統括管理運営機構・教授  (17401)	
研究分担者	小林 景 (Kobayashi Kei) (90465922)	慶應義塾大学・理工学部(矢上)・教授  (32612)	
研究分担者	吉井 誠 (Yoshii Makoto) (70240231)	熊本県立大学・文学部・教授  (27401)	
研究分担者	R・S Lavin (Lavin Richard) (70347699)	熊本県立大学・文学部・教授  (27401)	
研究分担者	相澤 一美 (Aizawa Kazumi) (00222448)	東京電機大学・工学部・教授  (32657)	
研究分担者	神本 忠光 (Kamimoto Tadamitsu) (20152861)	熊本学園大学・外国語学部・教授  (37402)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------